

第2-2部 パネルディスカッション

【横田】

それではこれから、会場から頂いた御質問にお答えしたいと思います。残る時間は1時間弱ですが、できるだけ議論を深めたいと思います。

最初に御質問くださった方は、僧侶の方です。まず、岩崎さんに

災害直後、避難所で障害者がほとんど見かけられなかったと聞いたけれども、それは本当でしょうか。どうしてでしょうか。

という御質問です。

【岩崎】

私は現地にいなかったのですが、正確なところは分かりません。ただ、避難所にいらなかったということは、いろいろなところで聞きました。

どうしていらなかったのかは、先ほどお伝えした通りで、車いすの方がトイレにも行けない状況だったり、あるいは体育館の床にお休みになるということが難しく、車で寝泊まりされていたり、あるいは御自宅が崩壊して残っていらっしゃれば、そのまま避難しないでいらっしゃったりだとか、御親戚を頼られてよそに行かれたりだとか、身体障害者や認知症の方を抱えた御家族の方は、そんなふうにごまかされたと聞いています。発達障害の方で、たくさんの人の中でなかなか上手に落ち着いてられないという方たちも、同様の状況だったとお聞きしています。

【横田】

ありがとうございました。恐らく、避難所で生活できる状況になかったということが真実なのだろうと思いますね。寝たきりの高齢者の方を収容していた病院の場合、病院そのものは何とか助かったのですが、その後入院されている方の救出ができず、必要なサービスが得られなくなって、電気が切れたり薬がなくなったり、あるいは、お医者さん、看護師さんがいなくなり、結果として命を失われたり重病化した方がたくさんおられたと聞きます。障害のある方が動けなかったというのが、かなりの場所で事実だったのではないかと、私も想像しております。

それから、同じ方から、今村さん、臼澤さん、大萱生さんに、

お話は大変興味深く伺いましたけれども、人権問題としてどう捉えられるかについて、もしお考えがあったら聞かせてください。

という御質問です。コーディネーターの私にも説明を希望しますとありますので、まず私からごく簡単に説明させていただいた上で、今村さん、臼澤さん、大萱生さんからお話を伺いたいと思います。

すでにこれまでのお話でお分りの通り、多くの方々の命が失われ、一方でやっと助かったという方もたくさんいらっしゃる。この生きる権利というのは、人権の中でも最も重要な項目です。そして、食べる、食事に対する権利、これも非常に大事な人権です。もちろん水、それから病気の方の場合には薬、必要な医療サービス、こういうことが保障されるということが人権の観点ではとても重要です。もちろん災害時にはそれがすぐには対応できませんが、できるだけ早く対応するようにするのが、人権の観点で重要なことなのです。日本国憲法でも、「健康で文化的な最低限度の生活を営む権利」と書いてあります。健康で文化的な最低限度の生活、これを保障するのは誰かということ、岩崎さんがおっ



会場風景

しゃったことですが、「確保する」という言葉を強調しておられましたが、国や自治体が確保する責任があるのです。果たしてあの時、迅速にそういうことが行えたかどうかというと自衛隊がかなり早く入って行えたところもあるのですが、状況が把握できないためにかなり放置された状況もあったということを知りますと、やはり問題もあったのではないかと思います。

また、子どもの教育をテーマに活動しておられる今村さんや臼澤さんの活動は、子どもたちの教育に対する権利の保障を御自身でやっておられるということで、大変重要なことだと思います。

今言ったようなことが、私のコメンテーターとしての一応の説明ですが、さらにもし付け加えて何か御意見があったら伺いたいと思います。どなたでも手を挙げていただけますか。今村さん、どうぞ。

【今村】

人権という言葉に、私も実はなじみがなくて、今回ここに登壇させていただくことも「ほんとにいいんですか」と伺ったのですが、広義の人権という意味では、明るく過ごせる居場所があるということ、全ての子どもたちに保障してあげるといことは、一つの重要な権利なのではないかなと思っています。

そういう意味では、今回たくさんの方々が大槌町内で職場を失われて、釜石をはじめ、遠方に働きに行かれていますと、子どもたちをまずは預かってくれる場所が欲しいという保護者からのニーズを聞きます。あるいは、一人親家庭がもともと多くその親がお亡くなりになったり、お父さんが遠洋漁業に行かれていますと、年に2回しかお父さんに会わない御家庭のお母さんが津波に流されたというような場合、お子様自身もやはり一人だと怖いという状況があります。そのような中で、子どもたちが元気にいられる居場所が保障されること、これも一つの人権の観点として重要なのではないかと、活動しながら感じています。

【横田】

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。臼澤さん、どうぞ。

【臼澤】

私は、今村さんみたいに論理的にはうまく説明できないのですが、ただ現実にあの時のことを思うと、やっぱり明日食べるものもない、みぞれが吹く中で寒さに震えている。そんな苦しんでいる人が目の前にいるとき、なんとかしなければならぬというのは、自然に出てくるものだと思います。

私の友達は「おまえは300メートル流されて、2回目の第二波では天井まで来たところで助かって、本当に運がいいな」と話されましたけど、私は生かされたと感じています。そういう中で、生かされた者同士何ができるか、避難所で毎晩毎晩悩みました。そして、今63歳ですけど、昨年、62歳になって初めて、全てなくなった時に感じたのは、苦しんでいる人がいたらお互いに生きなきゃならない、お互いに手を取り合っていかなきゃならない、ということでした。

皆さん方は、避難所の生活を想像したことはありますか。3月11日の晩に、寒さの余りに、私の隣に横になっていた高齢者の2人は、30分のうちに亡くなりました。もしかすると自分もそのようになるのではないかと思います。でも幸いに、おまえは生きろって生かされた。そういう中で、やっぱり生かされた者として何ができるかといった時に、目の前で苦しんでいる人たちと一緒に、手を合せて生きなくてはならない。それが私の活動の原点だと、今そのように感じています。

ですから、人権問題とか、私は難しいものは全く分かりません。でも苦しんでいる人がいたら、宮沢賢治じゃないですけど「大丈夫だ」って声を掛けながら、一步一步進んでいく。それが生かされた者、大槌では5,600人が幸いに生かされましたが、その人たちと手を取り合って、亡くなった人たちのために、進まなきゃならない。それが今、私の活動の原点です。ですから人権問題というと、本当に幅が広くて難しく、つかみ所がなく、なかなか私でもいいお話ができません。でも、人の気持ちを理解し合って、手を取り合って生きる、それが根本ではないのかなと、そんな気がいたします。とりとめのない話になってしまっていて、すみません。

【横田】

いえいえ、大変重要な点を指摘されました。

大萱生さんは、正に4人の方の命を救われ、ほかにも様々な活動をされていますが、人権ということを表に出したり、大上段に構えることなく、人権を守ることを実践したといえると思います。また、御遺骨を宗派に関係なく預かるということ、あのような震災の状況で実践されたということは、非常に貴重なことだと思います。この点について、何かさらに付け加えることがありましたらお願いします。

【大萱生】

津波の後、私が考えたことは、自分ができることは何か、自分が今の立場で、今のいる場所で行えることは何か、ただそれしかなかったです。宗教者として何ができると考えた覚えはありません。また、人権というのは、生きている人だけが持っているものではないと思うのです。亡くなった人の人権というものもあるでしょう。それがねんごろな弔いになるか、静かなお送りになるかは、いろんな形がありますのでそれぞれの家庭、残されたそれぞれの家族の思いを大切にしてきました。形にこだわらないで、全てやれることはやった方がいいなと思っておりました。

そして今、残った命、助かった人たちの折れそうな気持ち、折れそうになる心、そういう心をどんなふうにつないでいくかということが、気になるところです。実際、時間が経てば経つほど悲しみが募り、苦しくなるという方が多々います。ですから余り頑張れとは言えないですし、頑張れとは言えません。そういうときは、「私はあなたを見ていますよ」とか、「あなたのそばにいますよ」とか、そういう形でしか接することはできません。幸い私のところはお寺が残っていて、みんなで集まってお茶を飲んだりする場所がありますので、オープンに、もうそれこそ、震災後は、新興宗教の人たちやキリスト教の人が来たりしていますが、全部ウェルカムです。もう祈る気持ちや形に、宗教は関係ございません。そんな風にやっておりますので、変な寺だと言われてはいますが、そういう形でやっていくしかないかなと、今のところは思っております。

【横田】

ありがとうございます。これに関連しますが、次は岩手県の職員の方だと思います。経営支援課というところでお仕事しておられる方ですが、白澤さんに対しての御質問です。人権の中の一つの大事な権利に働く権利があると思いますが、白澤さんは話の中で、なりわいが大切だということに触れたので、それとの絡みでお聞きになっているのかと思いますが、質問はこういうことです。

起業支援について、女性の高齢者の働く場として商いを起こす際の課題、また、商いを続けていく上での課題がありましたら教えてください。

ということです。

【白澤】

なかなか難しい問題で、私も実は苦勞しています。先ほどプレゼンテーションした時に投影した写真の中のピンクのTシャツを着たメンバーは、まごころ広場を手伝ってくれているボランティアの方々です。ボランティアの方々も被災者なのですが、私は、被災者が苦しんでいるところを見た時に、この人たちの財布に小銭を入れる、そういうことをやはり考えました。具体的に何が出来るか、まごころ広場に來た人たちがいろんなアドバイスをしてくれました。そのアドバイスの中で、お好み焼きとかお弁当屋さんをやった方がいいのではないかとということで、内閣府の方から手を挙げてもらって、支援金を頂くことになったのです。でも当初は、被災者が被災地で起業するということに対し、「おまえ、ばかなこと言ってんじゃないよ」と私は怒られました。でも、そうは言っても、これから地元で自分たちが何かやらなきゃならないということで、1週間、2週間、いろいろ話し合い、大変な時間と労力を費やし、自分たちでやろうっていう気持ちを起こしてもらったというのが実状です。

しかしながら、起業には、初期投資が掛かりますし、内閣府からの200万円だけではとてもできるものではありませんでした。自分でもお金を出したり、ボランティアのNPOの人たちからも支援をいただき、その支援金とこれからの計画を、スタッフの人たちに話をし、実現までに持つていくのに、1か月ぐらい掛かりました。いろいろな失敗もありながら、一歩ずつ進んで今に至っています。ですから被災地で起業するということは、お金と、それからスタッフの心意気が非常に大事ななと思っています。

ただやはり、私は、被災地に小商いを多くつくっていくということが大きな支援になるのかなと思っています。まず第1号はお弁当屋さん、次は小さい駄菓子屋さんをいろいろなところにつくって、被災者の高齢者の支援につなげていきたいと思っています。

【横田】

ありがとうございます。それでは次に、全員に対する質問でございます。そのまま読ませていただきますけれども、

私は今回、関西から参加しましたが、今、関西ではいじめに関する報道が連日のように行われ、家庭や教育、企業、社会に対して大きな課題を投げ掛けていると思います。3月11日の東日本大震災をきっかけに、日本においても人と人との絆、コミュニケーションの在り方が改善されていると考えておりましたが、自分はこのようないじめによる自殺や傷害事件は残念でなりません。東日本大震災に遭った方々、あるいは避難所で、児童がいじめに遭っているということもよく聞きます。ここで4人のパネリストの方々に質問ですが、いじめについて率直な感想や意見を伺いたい。また、なぜ日本にはこのようないじめが多くあり、なくならないのか教えてください。

という趣旨の御質問ですが、岩崎さんからお願いしてよろしいですか。

【岩崎】

いじめの問題については、いろいろな立場からお答えすることができる課題だろうと思いますが、どうして起こってしまうのかという点は、最も究極なところでいくと、やはり人は良きところもあれば、人を妬んでしまったりとか、人を恨んでしまったりだとか、非常に美徳も持っているけれども、そういう貧しい気持ちというものが、誰しもが持っているわけです。ただ、そのマイナスの気持ちというものを、小さい時に、やっぱり上手に扱ってもらえる環境に恵まれたお子さんばかりではないのだろうと思うのです。ところが、この自分が育てられた環境が、次の世代に反映されるということもあると思います。人がどういう生活環境で育てられたのかということと、社会と無関係ではありません。

ですから、いじめの問題は、個人の資質とか、個人的な話のみにその原因を求めるとはできないと思います。やっぱり心の豊かさというものが十分に育まれないと、いじめにつながっているということは、私がソーシャルワーク的な立場で一つ申し上げられることかなと思います。

【横田】

ありがとうございます。質問に

特に東北でいじめがあると聞きます。

とあるのですが、今村さん、そういうことが実際にあるのか、御経験に基づいてお話しいただけますか。

【今村】

子どもが集まれば、いじめは必ず大なり小なり起こります。もうこれは避けて通れないものだと思います。また同時に、逆に無菌状態にして一切問題が起こらない環境にするということは、子どもにとっ

ては逆に、学ぶ機会を失っている状態とも言えると思います。いじめの加害者も被害者も、それを乗り越えることが勉強の機会だと思います。

今、私たちが取り組んでいる環境でも、つい1か月前にいじめと財布の盗難事件が起こりました。これは、子どもが集まれば必ず起こるものだと思いますので、その時に試されるのは大人だと思っていて、私たちは子どもたちをものすごく叱りました。全員集めて、財布が出てくるまではもう一切、放課後ここに来ておにぎりを買ったりパンを買ったりすることは禁止にすると。だからみんなで財布を盗んだ人と財布の在りかを全力で見つけろと、私もかなり怒鳴りました。それによって、いじめがなくなったとは思わないです。ただ、子どもたちには、それがだめなことなのだというのを、まず自覚させられたかなと思っています。

財布は結局出てきませんでしたが、ポストをトイレに置いて、子どもたちの中で何か嫌なことがあったらちゃんと言いなさい、言うことも勉強ですということ、自分で言ってこなければ守れませんということも伝えたら、子どもたちが手紙をよく入れてくれるようになりました。絶対に言わないでくださいと書かれた無記名の手紙や、記名されている手紙など、まちまちですが、子どもの間で起きることを、大人がどういう環境をつくれるか、それを乗り越えることもあなたの勉強という形で、どう毅然と叱れるかということが重要なのではないかと思いながら、私自身もトライアンドエラー（試行錯誤）中です。以上です。

【横田】

ありがとうございます。大萱生さんは何かこの点について御意見ありますか。

【大萱生】

私も息子がおりまして、小学校からずっとPTA会長をやったり、中学校卒業後は、岩手県独自の教育振興運動というのがあるのですが、その会長もしております。

子どもの世界ですから、当然いじめはあるのですが、大切なことは子どもと大人がコミュニケーションをとれているかだと思います。私は、そういう類の噂が入ると、知っている子どもたちが結構多く、親も知っている関係ですから、電話をかけて「おめえ、何やってた？」という感じで、大人は知っているよということを伝えていました。だから深刻になることはなかったと思いますが、親も先生も情報を吸い取って、深刻にならないうちに、子どもをなるべく注意深く見守ってほしいなと思っています。

【横田】

ありがとうございました。それでは、白澤さん。

【白澤】

私は中学校2年生の時に、廊下を歩くたびに徒党を組んで歩く不良少年の3年生が先輩におりまして、その先輩に、目が合うと毎回毎回バスカ殴られまして、こここのところ（顎）が今でもガクガクしています。余りにもひどいので、実は殴った相手に「担任の先生と校長先生に言うぞ」と言ったら、なんと昼休みに謝りに来ました。それでとりあえずいじめはなくなったのです。だから、その時に誰かにやはり伝えるべきだと、私は思います。

今、仮設住宅の代表をしていますが、いじめの問題も耳に入ります。相手が分かればその子どもにどうしてやるのかと、全部話を聞くようにしています。ところが子どもたちにとっては、単なる遊びの延長が、いじめのきっかけになっているのではないかなと思います。私の周りにあるいじめはそのようなことだと思っています。

また、これも余談ですが、私が震災に遭って、やはり自分たちの命を他人任せにしてきたのではないのかと思っています。何かがあれば行政が悪いとか、あの人が悪いとか、自分のことを全て誰かの責任に押し付ける、それが今の世の中ではないかなと思っています。こんなことを言ったら笑われるかもしれませんが、今、今村さんが教えている子どもたちも、もしかすると日本の首相になる

かもしれません。ですから、そういう子どもたちはやはり地域の財産だと思っています。ですから大人が、社会が育ててやらなくてはならないのかなと、思いながら、仮設住宅のガキ大将とも、コミュニケーションを図っています。質問に対する十分な答えになっていると思えないですが、私の体験は以上です。

【横田】

ありがとうございました。いじめの問題は、質問者がおっしゃってられますように、大震災だから、ということとは関係ないのですが、他方で大震災の時にも起こった、あるいは起こった可能性があるということで、いじめの問題そのものはまたこれからいろいろと研究が進み、みんなで考え、いじめがなくなるように努めていかなければいけないと思います。

震災との関係でもう一つ、白澤さんと大萱生さんに対して質問があります。

お二人とも被災されたわけですけれども、今までに元気づけられた言葉としてどのようなものがありましたか。

という質問です。もしすぐに思い付くものがありましたら教えていただけますでしょうか。大萱生さんの方からよろしいですか。

【大萱生】

言葉……、私は言葉より行動ですね、勇気づけられたのは。震災発生から1週間後まだまだ町中ががれきの時、盛岡の同期の和尚がリュックサックを背負って山を越えて来てくれました。(隣接する)宮古まで車で来て、その後はタクシーでなんとか来てくれました。泣きながら来て、抱き合っただけですが、私は山の火を消している時に、転がって、あばら骨を墓石におつけてしまい、ひびが入って、さらしを巻いて生活していたので、そのさらしの上からぎゅっと抱き締められ、「痛っ」という感じでしたけど。勇気づけられました。(笑)

道路ができてからは次々にお寺に来てくれる人たちの顔を見て、抱き合ったりすると、やはり勇気づけられたなという感じがします。あえて、言葉はないです。

【横田】

ありがとうございました。白澤さんは、お話の中で宮沢賢治に言及して、「雨ニモマケズ」という言葉を、今までは言葉で理解してそれなりに好きな言葉だったけれども、今度の震災を経験して、その行間に込められている気持ちが分かったということをおっしゃってられました。そのことを含めて、何か勇気づけられる言葉について、御感想があったら伺わせてください。

【白澤】

実は私は、震災前までは、こういうボランティア活動とかNPO団体の活動に身を投じるということは、全く想像もしていませんでした。いつも蛍を追ったり、トンボを追ったり、野鳥を追ったり、そういうフィールドワークをライフワークとしておりました。でも、3・11以降私の価値観が全く変わってしまいました。人のために汗を流して、自分たちが持って帰るものはいらない、達成感も地元で置いていくという、そういうボランティアの姿を見た時に、本当にこの人たちは神様だと、私はそのよ



会場風景

うに感じました。そういう人たちが胸に手を当てて被災者からいろいろな話を聞いて、被災者の気持ちをくみ取って涙を流している。そういう人たちとまごころ広場で活動を共にした時、私は被災者とともに生きるための勇気をもらいました。

それと同時に、苦しんでいる人に涙を流す、その光景を見た時に、本当に私は自分の気持ちが奮い立ち、絶対この人たちの思いをずっと継続していこう、そう感じ、今もその思いが活動の原点にあります。そのおかげで現在に至っております。多くの人たちの思いが、私の背中を押していると、そういう感じがいたします。

【横田】

ありがとうございました。もう一つ、全員の方に、ある意味ではまとめのような質問になるかと思えますけれども、

被災地で今、そしてこれから、最も必要なことは何だと思えますか。

という御質問です。これについて、お考えを聞かせていただければと思います。それでは、白澤さんからお願いします。

【白澤】

いろいろなところでお話をする機会がありまして、「被災地では、これから何が必要ですか」とよく聞かれますが、私は「全て」と答えます。今、戦争状態のような中で、これという特定のものを挙げるのはなかなか難しい、多くて言えません。逆に、「私だったらこういうものができます」ということを伝えていただければ、それを私たちが現地で苦しんでいる被災者につないでいくということはできます。

今、被災地では仮設住宅に入っている人、地域づくりを一生懸命頑張っているNPOもごございます。地域づくりというのは、仮設の生活もそうですし、私たちがやっている農園、小商い、全てが地域づくりにつながりますので、それが一体となって復興につながると思っています。ですから、私は全てが必要だと言いつけております。

【横田】

ありがとうございました。大萱生さん、いかがでしょう。

【大萱生】

私は6月まで大槌のライオンズクラブの会長をやっておりました。メンバーは12人しかおりません。震災で3人流されましたし。

昨年からずっといろいろな支援を皆様から頂きました。今年になってからは、名古屋や長野など各地から電話も頂きました。「何か欲しいものはないですか」と。私は、「いりません」と言いました。「欲しいものはないよ」と。「いや、もしも何か送ってくれるのだったら、一人でもいいから、交通費を負担して、大槌に来て写真でも撮って行って」と言いました。「被災地を見に来て。やっぱりそれで分かるから」と。

願うことは、震災や被災地のことを忘れないでほしいということです。この間は九州で大雨が降って、大変な災害でしたが、テレビなどで見て、ああ、大変だなと思ってもオリンピックが始まってしまえば、皆さんの頭からその災害のことが忘れられてしまいます。だから、たまにでもいいから思い出してくれやということで、例えばライオンズクラブでは、「一人でもいいから顔出して。なんぼでも案内するから。被災地観光をしましょう」と呼び掛けております。今はそういう状況です。

【横田】

ありがとうございました。それでは、今村さんはどうでしょう。

【今村】

私は現実的な話になってしまうのですが、ヒト・モノ・カネという言葉がありますが、私は今、これから一番必要になってくるのは、やはり人と金だと思っています。

金というのは寄付だけではないかもしれませんが、先ほど臼澤さんがおっしゃったように、経済性を取り戻すということが何よりも個人の自立につながりますので、できるだけ大槌や三陸のものを少し高くても買っていただくということは何よりもだと思えます。一方で、私たちは寄付を原資にして運営しています。どうしても、御家庭の所得の問題で学校外教育に予算を使う御家庭が多い地域ではありませんので、しばらくは寄付を原資に無料で行っている状況なのですが、そういう意味では、運営していく上ではやはり寄付が必要なのです。

ただ、同時に必要なのはやはり人です。今までは短期的にボランティアに来ていただいていた。ただ今年から、1週間単位のボランティアさんはお断りすることになっています。私たちの場合は教育活動を中心にしており、子どもたちとの関係性も積み上げが重要になるので、一瞬しか出会えない人との関係よりも1か月いてくれる人、1か月いてくれる人よりも1年そこにいて、場合によってはそこで住民になって一緒に頑張り続けてくれる人がやはり必要です。今、新しく7名採用しましたが、みんな遠方から来ています。外務省を辞めて来てくれる人だとか、NTTデータを辞めて来た人とか、みんな今、どうしても被災地に関わりたい、それを仕事にしたいという人も出てきています。

です。少ししか関われない方々は是非ともお金を、プロとして現地に入って働き続けると言っている人たちに対して、カタリバやまごころネットさんのような団体で職員をやるスタッフの人件費に使えるような予算を、是非とも皆さんに御支援いただければ、私はすごくありがたいと思います。以上です。

【横田】

ありがとうございました。それでは岩崎さん、お願いします。

【岩崎】

先ほど、臼澤さんが、形のあるものよりも形のないものとおっしゃって、私もレジュメに同じようなことを書かせていただきましたが、形のあるものは、いずれはやはり満ち足りてくる可能性があります。一方で、形のないものは非常に重要で、でもそれが、求められているものと、私たちのように被災してない者が想像するものというのが、すれ違ってしまう可能性もあると思うのです。

震災直後に、私たちソーシャルワーカーの団体も被災地に入れ替わりで人を送っていたわけですが、先ほど今村さんもおっしゃいましたが、やはりその地に長くいらっしやるとか、いらっしやったことがあるとか、そうでないと現地にはいかないよと、最終的にそういうふうに言われてしまうわけです。だから、私も専門職として、形のないものをいい形でお届けできればと思いますが、その点が課題で、また、被災地で何が本当に必要なのかということは、逆に、教えていただきたい立場であるということに尽きてしまいます。申し訳ございません。

【横田】

今の岩崎さんの話、今村さんの話とも通じるところがあるかと思いますが、私も東京に住んでいましたので同じような印象を持っています。東北の方たちには、我々に何をしてほしいか、率直にどんなことを伝えてほしいと思います。できないこともありますけれども、できることもあるかもしれない。東京にいて周りと話をしていると、みんな何かしたいという気持ちを純粋に持っています。でも、自分たちのすることが、かえって現地の人々の気持ちを傷つけてはいけないという配慮が働いて、行動に移せない状況もあるように感じています。

昨年も、「震災と人権」をテーマにシンポジウム（東京、大阪、仙台の3会場）を開催したのですが、その時に関西の方から、「東北頑張れ」という言葉を見掛けたが、これは現地の人にとっては、かえって感情的にこじれるのではないかという質問が出ました。私はその質問に対しては、いや、実はもう東北でも自分たちが頑張ろうということで、「東北頑張れ」という垂れ幕やのぼりなどがあちこちに出

ていますし、現地の人たちがそう言っているものを我々が遠慮することはないので、同じ言葉で応援しようじゃないかということ、私はその時述べました。また、既に今村さんもおっしゃっていましたが、物を買う時、東北産のものにはいいものがあるという側面もちろんありますが、同時に、同じ物を買うなら東北のものを買おうという気持ちは、東京の人、関西の人、日本中の人にあります。それから東北に旅行に行こうという機運も最近高くなってきましたけれども、最初のうちは実は遠慮がありました。被災地に物見遊山のような形で行くのは失礼ではないかという考えからです。しかし、東北の方たちから「是非来てください」という声が上がりました、それではということで東北へ来る人が増えてきているようです。実は私の息子も、2、3週間前に連れ合いと一緒に福島まで行って旅行を楽しんできました。東北に行きたいという気持ちは恐らく日本中の方が持っていると思います。このように日本中に、東北のものを買いたい、あるいは東北を旅行したいという気持ちを持っている人は結構いると思いますので、その点は東北の方々も是非そのような気持ちを受け止めていただきたいというのが私の感想でもあります。

今日は、現地で被災され、被災された他の方たちとも日常的に接しておられるお二人と、それからもともとは東京にいて現地のことを考えて自分の専門分野から復興に関わっておられるお二人のお話を聞かせていただきましたが、大変私にとっても勉強になるお話がたくさん出てまいりました。残り時間が5分ぐらいですので、私からまとめの話をさせていただこうと思います。と申しましても、今日ここで出てきた言葉の中で、特に私が教えられた、勉強になった言葉を一つ一つ挙げて、皆さんと一緒に考えていけたらいいなと思っております。

まず一つ目は、最初に白澤さんがおっしゃったことで、その後も何度も強調されたことですが、本当に必要なのは物ではなくて心だということです。この体験を通しての言葉には非常に重みがあって考えさせられると思います。もちろん、その日生きるためにはおむすびが必要です。ですけども、それで満たされるのはその時だけであって、もっと長続きするものが必要なのだということを教えられた感じがいたします。

それから、「生きる」ということについてです。たくさんの方が身内の死に接する中で、生きるということについて考えさせられたと思います。そして、私たちも東北の方々の悲しみを受け止めると同時に、やはり生きるということの意味を考えさせられたと思います。この点に関して、東北の方に非常に元気づけられたのは、いつまでも悲しみに暮れるだけに終わるのではなく、むしろ、希望という言葉が何度か出てきましたけれども、希望を持って明るい未来を切り開くという姿勢が東北の方々からたくさんいろいろなメッセージの中で出てきていることです。そういう前向きの姿勢で復興に取り組んでおられる東北の方たちに対して、私たちも一緒にやろうという気持ちになる感じがいたしました。

それからもう一つ、強調されたことは、援助することはもちろん大事なことですけれども、一番必要なのは自立であり、自分たちで働いて社会に貢献すると同時に、そこから生活の糧を得るということに東北の方たちが非常にこだわっているということです。これも非常に大事な点で、私たちは教えられました。

人は一人で生きるものではなく共に生きるということもまた、何度か強調されましたけれども、必ず誰かがあなたのことを思っているということ、今回の災害を通じてみんな感じたことだと思います。これも今日いろいろとお話を通じて私が教えられたことです。

まもなく終了時間になりますので、そろそろこのシンポジウムを閉じさせていただこうと思います。

まず、パネリストの4人の方にお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。(拍手)

それから、手話通訳、そしてパソコン要約筆記をしてくださったボランティアの方々にもお礼を申し上げます。ありがとうございました。(拍手)

最後になりますが、会場ですっと私どもにお付き合いただいて熱心に聞いてくださった会場の皆さま、どうもありがとうございました。(拍手)

以上をもちまして、本日の人権シンポジウム in 盛岡を終わらせていただきます。ありがとうございました。